

来年1月、トランプ大統領が誕生する。2008年にオバマ旋風が起きたアメリカで今回、トランプ現象が起きたことをどのように理解すれば良いのか。トランプ氏の世界観とは。アメリカ政治・外交を研究する中山俊宏氏に聞いた。

オバマとトランプには奇妙な連続性がある

慶應義塾大学総合政策学部教授 中山俊宏

トランプ支持者とトランプを支持しない人の分断線

――先週はアメリカの大学で講演されたそうですが、トランプ氏当選に対するアメリカの若い世代の反応は？

中山 やはり大学という空間はどうしてもトランプに批判的な雰囲気強いですね。トランプ現象の熱気みたいなものは一切感じませんでした。

今回はあえて共和党が強い州に行ったのですが、得票数を見ると、テキサス州にしてもユタ州にしても、共和党と民主党の差がこれまでより狭まっています。テキサス州ではブッシュ家がトランプに反旗を翻し、ユタ州では、2012年の共和党大統領候補で、モルモン教徒のリーダーの一人であるミッド・ロムニーがトランプをかなり強い調子で批判したので、トランプに対する支持はレッドステート（共和党の州）にしては限定的との印象を持ちました。

学生たちの間では、これからアメリカはどうなっていくのかといった不安が目立っていました。相当な社会的騒乱前夜なんじゃないかと。トランプを支持した人たちと、支持しなかった人たちとの間の分断線は、今回は人種がかなりのウェイトを占めたと思いますが、一方で教育水準も大きなインパクトを持っていて、大卒の有権者はクリントン支持にかなり傾斜しました。

大学で勉強し、国際的情勢に関心を持ち、日本からきた大学の教員の話をわざわざ聞きに来る学生はトランプ的な世界とは対極の場所において、アメリカがトランプを大統領に選出してしまったことを世界がどう見ているかを非常に気にしていました。

――選挙中のトランプ氏は、アメリカが20世紀後半で否定してきた価値観――特に少数派への差別的な発言が目立ちましたが、そうした発言を支持する人がこれほど多くいることに驚きました。

中山 私がよく訪れるアメリカは、ワシントンやニューヨーク、あるいは大学街が多く、そうした街でトランプ・サポーターに会うことはほとんどありません。だから、われわれの知らないアメリカがトランプを選んだような気がして、「トランプ・ショック」みたいな言葉をつい使ってしまうのですが、一方で、私が9月中旬に訪れた、トランプ現象の震源地であるアメリカン・ハートランド（中西部）のオハイオやペンシルベニアでは、トランプを支持す

ることがむしろ当然という世界が広がっていました。『ニューヨークタイムズ』や『ワシントンポスト』といったエスタブリッシュされたメディアを介して伝えられるトランプ現象は、危険なエネルギーを解放してしまったという点がことさらに強調されていました。それはまったく違う視点でトランプが捉えられている地域もあるわけです。

また、彼らは人種差別的な感情に突き動かされているというより、むしろ変わっていくアメリカの中で自分たちの居場所がなくなっていくことや、自分たちが知る社会が消えていくことに対する不安や憤り、怒りを抱えています。その結果、行動様式としては多様性を否定し、時に人種差別的に見えてしまうものの、トランプ支持者を人種差別主義者と一括してしまうのは明らかにおかしいと思います。

先ほども申し上げましたが、彼らの教育水準は決して高くありません。彼らが生活の糧としてきた製鉄所や炭坑、

そしてそれらを周辺で支えてきた産業は経済構造の変化によって雇用を提供できなくなっています。彼らはかつてアメリカン・ミドルクラスとしての誇りを持っていましたが、もはやその自己イメージは崩壊してしまっています。

仮に勝ち組・負け組という表現を使うと、彼らは一流大学を出て、新しいスキルを身に付けて、押し寄せるグローバル化・バリゼーションの中で柔軟に自由に行き回っている勝ち組では決してありません。社会は、常にこういった「勝ち抜けない人たち」を生み出していきます。

アメリカは努力して成功した人が報われるメリトクラシー（能力主義）の社会で、自分の努力で「勝った人」はある意味絶対的優位を獲得する。それゆえ「勝った人」の「負けた人」に対する思いやりが時として希薄になってしまふ。オハイオやペンシルバニアなどのトランプ現象の震源地に足を踏み入れると、そう強く感じました。そして、そうした場所からオバマ大統領を見たとき、彼は成功した人の、ある種の極みなんです。

オバマは、「経済構造が変化する中で、炭鉱はなくなってもしょうがない。石炭からほかのクリーンなエネルギーに乗り換えなければならない」「もはや製造業はアメリカに呼び戻せない」「グローバル化・バリゼーションの中で生き残っていくためのスキルを身につけていかなければいけない」という、ある意味もつともな解決策を提示しました。しか



なかやま としひろ：1967年生まれ。青山学院大学大学院国際政治経済学研究科博士課程修了。博士（国際政治学）。『ワシントンポスト』極東総局記者、ブルッキングス研究所招聘客員研究員、津田塾大学准教授、青山学院大学教授などを経て現職。著書に『介入するアメリカ』『アメリカン・イデオロギー』など。

し、誰もが柔軟に社会的変動に適応できるわけではありません。さらに、オバマは「居場所のない人たちが、やり場のない不安をやり過ごすために銃や宗教にすがらんだ」とつい本音を言ってしまったことがあった。

トランプ・サポーターたちは、自分たちが依拠して来た価値観や空間が、大統領によってあたかも質的に劣っているかのように見なされていることに對して、大きな憤りを感じています。彼らの生活様式そのものが大統領によって否定されたと感じたわけです。

そこに、トランプが無い降りてきた。そして、「あなたたちの感じている不安や怒りは正しい。それをいま表明しないと、アメリカは永久に変わり果ててしまう」と言って、彼らの不満や怒りを表明する場を与えました。これがトランプ現象の中核的なエネルギーです。自分の声がどこにも届かないと感じている人たちに声を与えたわけです。

壊れたアメリカンドリーム

——アメリカには絶えず移民が入ってきて、新しい産業なども次々に生まれてきたと思うのですが、なぜいまこのようなかたちで不満が爆発したのでしょうか。

中山 それはやはり閉塞感だと思いますね。一部の地域で「出口なし感」のようなものがかかなり溜まっている。これまでアメリカでは、あまり格差が問題になってきませんで

した。それは、「自分の世代では難しい状況から抜けられないかもしれないが、子どもや孫の世代ではきつと向こう側にいける」というアメリカンドリームが信じられてきたからです。アメリカのように常に新しい移民を迎え入れてきた国にとって、このアメリカンドリームは、水や電気、道路、インターネットなどと同じ必要不可欠なインフラです。このアメリカンドリームが、他国では格差問題として表出していたものを時間軸の中で平準化させてきました。トランプは「アメリカのインフラは壊れている」と繰り返し言っていますが、実は一番壊れているのは、このアメリカンドリームではないか。

——トランプ氏の「アメリカを再び偉大に」というスローガンですが、これは具体的にいつの時代のアメリカをモデルにしているといった明確な話ではないのですか？

中山 きわめて漠然としたものだと思います。コアなトランプ・サポーターの集会に行って後ろから彼らの姿を眺めていると、圧倒的に白人男性が多い。彼らは屈強な身体つきの労働者で、多くの人は髪も薄く、40代半ばから60代後半ぐらいまでの人たちです。まさに期待通りという光景でした。実は、私も年齢的にはその中に入っていて、70年代はアメリカに住んでいました。

その頃はピッツバーグ・スティーラーズという——「ステイラーズ」というのはまさに鉄ですが——NFLのフット

意深く論じていかなければいけない。

オバマもトランプもアメリカの役割を限定的に捉えている

——外交面に移ります。先生はほかのインタビューで、トランプ現象は8年間のオバマ政権の反動といったお話をされていたと思うのですが、世界におけるアメリカのあり方をオバマはどのように捉えているのでしょうか。

中山 オバマとトランプというのは複雑な関係で、オバマが意図したわけではないにせよ、「オバマ的」なるものがトランプ現象を構成するものを刺激したことは明らかです。トランプは、オバマが象徴するものを全否定する存在であるわけですが、オバマとトランプは外交についてはある種の連続性があるようにも見える。それは、二人とも全く別のロジックに基づいてはいますが、アメリカの役割を限定的に捉えているという点です。これは、言わばアメリカが国際社会から引こうとしていることの表象です。

オバマは、言ってみれば、世界市民的な大統領です。これはアメリカの文脈では褒め言葉ではなく貶し言葉で、現に国内からは「あなたは世界市民ではなくアメリカの最高司令官でしょう」という批判が飛んできます。彼は、世界をアメリカに適応させるのではなく、アメリカを世界に適応させることに関心を注いできた。「アメリカが単独でできることは限られている」ということを前提にして、アメ

リカの外交を組み直したと言えます。

一方で、トランプの世界観を根底で支えるものはオバマのそれとは全く違うものの、やはり彼もアメリカの国益を限定的に捉えています。彼の場合は、アメリカにとつての直接的な脅威、あるいは直接的な利益のみを考えている。

彼らは共に、アメリカの力で国際秩序や国際規範を下支えしていくという発想が希薄です。オバマの場合はアメリカの力は限られている、トランプの場合はそんな重荷を背負いたくないという発想です。向いている方向は逆ですが、オバマとトランプの間には奇妙な連続性があるわけです。

それでもオバマは、グローバルな規範の形成にあたってアメリカが中心的な役割を果たさなければならぬと確信しています。ただ、世界が直面している問題の性質を踏まえると、アメリカンパワーが解ではないとも考えています。しかし、気候変動やパンデミックなどの「実存的脅威」に向き合うには、国際社会を方向付ける規範形成は不可欠であり、その点でアメリカがリーダーシップを発揮する必要があると認識していると思います。

トランプはそうではなくて、アメリカに対する直接的、物理的な脅威についてはむき出しの力で対抗するでしょうが、平時に国際秩序や規範をアメリカの力で下支えするという発想は希薄です。また国際情勢を損得勘定で見ているようなところがある。選挙中にも、これまでのアメリカの

同盟国を不安にさせるトランプの世界観

——トランプ大統領の下で、日米同盟の適用範囲がアメリカに対する直接的な脅威に限定されることもあり得ますか？

中山 そうなれば同盟は成立しません。トランプは日米同盟だけでなく、同盟全般に関して不信任感を表明してきました。その場その場の損得勘定の発想で成立しているトランプ的な世界の中では、同盟の有用性はなかなか見えてきません。同盟は、短期的に目に見えるかたちでその有用性を確認することはできないので、アメリカが儲けた・損をした、日本だけが得をしているじゃないかという話になる。それは先ほど申し上げた通り、抽象度の高い国際秩序や規範に対する感覚が希薄だからだと思います。

第二次大戦後のアメリカは、国益を非常に大きく捉えてきました。グローバルな秩序や規範をアメリカンパワーで下支えし、その秩序や規範の中にアメリカの国益を埋め込んできた。そして、地域的な文脈では、同盟国と共にそれを支え、同盟国もその利益を享受し、地域の安定にも寄与してきました。もちろん、例外もあったし、ダブルスタンダードもあった。しかし、このアメリカが支えてきた戦後国際秩序は「リベラル・インターナショナルオーダー」と呼ばれ、日本のような国は大きな恩恵を受けてきました。しかし、トランプ氏にはこういう発想がなく、同盟国を不

国際的なコミットメントについて疑念を呈するような発言を繰り返してきました。日米同盟に関しても、かなりはっきりと不信任感を表明しています。選挙中に言ったことをそのまま政策に変換するとは思いませんが、同盟を当然視することはできない。そのことを思い知らされました。

安心材料があるとなれば、トランプが誰かの話に耳を傾けるとすれば、それは軍人だろうと私は思います。いま人事の指名プロセスが進んでいます。トランプ政権の外交安全保障関連の重要ポストの候補には制服組の名前が多く挙がっています。彼らはアメリカが築き上げた同盟網を維持することに強い関心を持っているし、日米同盟に関してはとりわけ強い支持がある。ですから、トランプ大統領が同盟の存続を脅かすようなことをすれば、制服組からの適切なアドバイスが期待できます。

アメリカがアジア太平洋地域で積極的な役割を担おうとするなら良いパートナーが必要で、現実問題としてアメリカがこの地域から引くというオプションはない。となると、日本はパートナーとしては群を抜いています。日米同盟は秩序維持の観点から不可欠なツールだし、日本にとつてのみならずアメリカにとつてもベストチョイスだと思っています。そして、この地域でも秩序安定装置として歓迎されている。その辺りの現実、リアリズムが作用して同盟について大きなハブニングが起これなければいいと思うしかない。

安にさせています。

いまトランプの勝利を歓迎しているのは、リベラル・インターナショナルオーダーの中で居心地の悪さを感じている国々です。トランプは、そもそもリベラル・インターナショナルオーダーなるものを感覚的に捉えられていないので、ロシアや中国が提起する問題を理解できていない。国家とはそんなものだという居直りさえ感じる。プーチンに讃えられて、「プーチンは力強いリーダーだ」と返すトランプは、これまでのアメリカの大統領像とは合致しません。——トランプが考える脅威とは具体的には何でしょうか？

中山 IS（イスラム国）をはじめとするアメリカを標的にしているテロリストだと思っています。オバマは、「グローバルな暴力的過激主義（オバマは決してイスラム過激主義という表現は用いないようにしています）」はアメリカにとつて確かに脅威だし、彼らはアメリカ国内でテロを成功させるかもしれないが、アメリカの生存そのものを脅かす脅威ではない」という言い方をしています。これは認識としては正しいと思います。ただ、一般のアメリカ人の脅威認識からは乖離している。オバマはどこか超然としていて、悪い意味でインテリ風と言ってもいいと思います。

トランプは、オバマのこの超然としたところを突いて、「イスラム原理主義」という言葉さえ口にできないオバマ大統領の「弱さ」を批判し、「イスラム原理主義」と「イ

スラム教徒」を一緒くたにしてその異質さを告発します。もう一つの脅威は、経済的な脅威でしょう。もしくは、不公正な諸外国にアメリカは出し抜かれているといった陰謀めいたグローバル主義批判です。ともすると、日本と中国が不公正な通商国家ということで一緒くたにされて論じられることもあります。

トランプ主義の最大の弱み

——「すぐ大雑把な質問ですが、トランプは歴史上の人物だったら誰に似ているとお考えですか。

中山 例えばマッカーシー上院議員だと言う人もいれば、パッド・ブキャナンと酷似していると言う人もいる。リンダーバーグのアメリカ・ファースト、扇情的なポピュリストということでヒューイ・ロングなどもよく上がる名前です。カスター將軍だと言った人もいました。でも、今年、日本全国で講演して私がよく出した名前は西郷隆盛です。

もちろん、西郷とトランプの違いは明らかです。あえて西郷と言うときに私が想定しているのは、西郷という人は、日本の近代化に対する抵抗の象徴を担われた人だということです。西郷の抵抗がなければ明治維新は完結しない。トランプも、アメリカが大きく変わる中で、変化に対して「ノー」と言う勢力と共振してここまで台頭してきました。西郷との最大の違いは、トランプは勝ってしまったとい

うことです。私が西郷の名前を出した時には、双方とも「勝利の方程式」がないことを前提にしてきました。その点で、この喩えは外れたったということかもしれません。

ただし、今回に限って言えば、トランプは勝ちましたが、長期的に見たとき、いまアメリカが直面している問題にトランプが答えを提供できるとは思えません。確かに白人がマイノリティのような投票行動をとれば選挙に勝てることをトランプは示しました。しかし、トランプ支持者が直面している閉塞感は、トランプの掛け声では解決しない。

「グローバル主義」を退け、変わっていくアメリカを否定することは、何ら解にはならないと思います。抵抗はしても、勝利の方程式を示すことができないという点も、トランプと西郷は若干重なるところがあるように見えます。西南の役が明治10年、アメリカの変化を象徴したオバマ政権の誕生とトランプの乱の間が8年です。明治維新と西南の役は切り離せません。同様に、2008年のアメリカと2016年のアメリカも、まったく別のアメリカというよりは、両方でいまのアメリカと考えるべきなのではないか。

少々強引な喩えではありますが、私は、近代への抵抗、変化への抵抗という点で、西郷隆盛を通してトランプを見るとわかりやすいかなという気がしています。

——最後に政策ですが、現実には選べる選択肢としては、歴代政権とトランプ政権の間にある程度、連続性があると考えてもいい？

中山 トランプ大統領が現実健路線をとるかどうかが、私にはわかりません。大統領というポストはそれ自体に重みがあつて、やりたいようにはできない。しかし、いかんせんトランプという人はこれまでの大統領の型にはまりません。彼は誰にも政治的な借りをつくっていないし、しがらみもない。あえて言えば、トランプはそれと約束だけです。

また、「トランプは勝つために荒唐無稽に振舞ってきた」と言う人もいますが、私はそれを信じません。アメリカの大統領選は長いし、その間、絶えずメディアの目に晒され続けます。このプロセスの中で、虚像を演じられる人があるとは思えない。今回の選挙キャンペーンで浮かび上がったのは、敵を効果的に設定し、自分に有利な対立の構図を作り出し、そして競争相手を徹底的に貶める「トランプ主義」でした。しかもトランプはそれを緻密に計算して行うのではなく、感覚的にやりきってしまった。

選挙に勝った後、特に勝利演説では、彼は大統領らしく振舞っていました。しかし、その後の行動や発言は揺れ動いています。人の言葉に耳を傾けるトランプか、暴言を吐き続けるトランプか。トランプ政権が何らかの成果を出せている間は、大統領らしく振る舞うでしょうが、それも長くは続かないかもしれない。壁に直面すると、敵を設定して対立構造をつくるというスタイルが再び現れるかもしれ

ません。ただ、そのドラマに国民が乗ってくるかどうか。国民がトランプ・ドラマに飽きてしまえば、それがトランプ主義の最大の弱みになる。それが起こるのは、結局トランプでも何も変わらないという感覚が蔓延したときです。

——そのときが大変ですね。

中山 しかし、トランプも化けるかもしれません。冷戦終了後の三人の米大統領は、いずれも亀裂を修復すると言いつつも、分断をさらに深めてしまいました。トランプは、保守とカリベラルとかイデオロギーを超越しています。ハードライト（極右）に傾斜しつつもインフラ投資に積極的であるとか、LGBT（性的少数者）の問題については寛容であるとか、意外に地球温暖化問題については柔軟かもしれないとか、とにかくどうなるかわからない。それがうまい方向に作用して、曲芸のように分断を乗り越えていつてほしいというような根拠のない期待もあります。

いずれにせよ、われわれが知っているのは、選挙の時のトランプです。統治モードに入ったトランプは誰も知らない。ですから落ちていて、過剰反応せずに——とは言え今日の話は過剰反応気味でしたが（笑）、日本にとってのアメリカの重要性、アメリカにとっての日本の重要性を強固に説き続けて、トランプ政権の間に大きな事故が起こらないようにする。当面はそれ以外にオプションはないですね。

聞き手・本誌 田中広美（2016年11月28日収録）